

学位論文要旨

子どもの食物選択力の形成過程に関する研究

広島大学大学院教育学研究科 学習開発専攻

中村喜久江

## I 論文題目

# 子どもの食物選択力の形成過程に関する研究

## II 論文目次

### 序章 研究の背景と目的

#### 第1節 問題の所在と研究の視点

- 1 問題の所在
- 2 研究の視点

#### 第2節 先行研究の検討

- 1 家庭科における食の実践に関する指導の動向
- 2 小学校家庭科の栄養教育における知識の獲得，構造化，活用
- 3 思考スキルの育成

#### 第3節 研究の目的と方法

- 1 研究の目的
- 2 研究の方法と論文の構造

### 第1章 「学習の次元」による食物選択力形成の検討

#### 第1節 「学習の次元」における知識の様相と学習方法

- 1 「学習の次元」が構想された背景
- 2 マルザーノらの「行動モデル」と「学習の次元」
- 3 「行動モデル」及び「学習の次元」を援用する意義

#### 第2節 食物選択力形成に関わる知識と学習方法

#### 第3節 「学習の次元」を援用した食物選択力を形成する学習

- 1 「学習の次元」に基づいた単元設計
- 2 小学校家庭科における食物選択力形成のための単元設計

### 第2章 食物選択力を形成する学習方法及び教材の検討

#### 第1節 食事選択力形成に関わる知識及び食事に関する意識の実態

- 1 小・中・高等学校で家庭科を学習してきた大学生の実態
- 2 食品群の理解に関する課題改善の方策とその効果

#### 第2節 食物選択力形成に必要な知識に関する教材の検討

- 1 教材の開発とその位置づけ
- 2 開発した教材の有用性－小学校教師の評価－
- 3 「料理－食品群充足率カード」を活用した学習の具体化とその有用性－小学校における授業実践から－

#### 第3節 予備的授業実践における知識の構造化及び活用に関する課題

- 1 予備的授業実践の目的

- 2 調査の方法
- 3 知識の獲得，構造化，活用に関する結果及び考察
- 第4節 開発課題の考察
  - 1 食物選択力形成に関する知識と学習
  - 2 推論の手がかりとなる教材（思考スキルを形成する教材）
- 第3章 食物選択力を形成する授業モデル及び教材の開発
  - 第1節 食物選択力形成過程における知識とその学習方法
    - 1 知識の獲得とその学習方法
    - 2 知識の構造化とその学習方法
    - 3 知識の活用とその学習方法
    - 4 授業における教材の利用
  - 第2節 推論プロセスを重視する教材の開発
    - 1 食物選択力を形成する基礎となる知識の獲得及び構造化に関する教材
    - 2 推論の方法及び食事の栄養的バランスを判断する教材
  - 第3節 食物選択力を形成する授業モデルの開発
    - 1 「次元2」の学習の具体化
    - 2 「次元3」の学習の具体化
    - 3 「次元4」の学習の具体化
    - 4 授業モデルの独自性
- 第4章 授業実践
  - 第1節 授業の概要
    - 1 食物選択力を形成する基礎となる知識の獲得及び構造化
  - 第2節 推論の手がかりとなる教材，知識の活用を促す教材の作成
    - 1 推論の手がかりとなる教材
    - 2 食事の栄養的バランス，推論の方法を学習する教材
- 第5章 授業実践による食物選択力形成過程の分析と評価
  - 第1節 調査の概要
    - 1 調査の時期及び調査対象
    - 2 調査方法
    - 3 調査票の位置づけ
  - 第2節 「事実」としての知識の獲得過程の分析
    - 1 食品の栄養的特徴に関する知識の獲得
    - 2 料理の栄養的特徴に関する知識の獲得
  - 第3節 「一般化」による知識の構造化の過程の分析
    - 1 食品群の特徴
    - 2 「基準となる料理」の栄養的特徴

第4節 構造化した知識の検索，活用過程の分析

- 1 複合的料理の栄養的特徴（質・量的）
- 2 食事の栄養的特徴（質的）
- 3 食事の栄養的特徴（質・量的）
- 4 条件に適した食事の栄養的特徴（質・量的）に関する判断

第5節 授業モデルにおける食物選択力形成過程に関する考察

- 1 「事実」としての知識の獲得及び「一般化」による知識の構造化
- 2 構造化した知識の検索，活用
- 3 子ども一人ひとりに着目した食物選択力の形成過程

終章 総括

第1節 本研究で得られた知見

第2節 本研究の限界と今後の課題

### Ⅲ 論文の要旨

#### 序章 研究の背景と目的

本研究は、小学校家庭科を対象に、マルザーノらの「行動モデル」(マルザーノら, 2007), 「学習の次元」(マルザーノら, 2009)を援用し、食物選択力形成のための授業モデル及び教材を開発し、授業実践により実証的に検討し、授業モデル及び教材の有効性と食物選択力形成過程を明らかにすることを目的とする。

食教育の中でも、栄養教育は健康な生活を支える基盤となるものである。生活を総合的に捉え学びを進めていく家庭科教育においてこそ行う意義が非常に大きい。これまでの家庭科における栄養教育では、「食品の栄養的特徴」(小西ら, 1994)等の知識の理解、そのための学習方法については成果があがっている。しかし、知識の活用については課題が残っている(中村, 1995)。学習した知識を日常の食事場面で活用できない理由は、多様な子どもの日常生活で活用できる学習内容及び学習方法、さらに知識の活用過程で必要となる知識を検索し、活用する思考スキルを明確にした学びを進めてこなかったことが考えられる。

日常生活で活用することを志向した知識及び知識を構造化する思考スキルと知識を検索し、活用する思考スキル、その学習方法については、マルザーノらが知識の性質を踏まえ、知識を獲得し、構造化し、有意味に活用すると同時に思考スキルを形成するための学習を提唱し成果を上げている。一方、子どもの多くは食材を購入し食事を作る経験が乏しく、小学校では、中・高等学校で実施される「食材料選択型」栄養教育(足立, 1984)への準備段階として、料理に着目し、その栄養的特徴から食事の栄養的特徴を判断し目的に合った食事を複数の食事の中から選択する能力として食物選択力を育成する必要がある。

そこで、本研究では、食物選択力を知識の獲得、構造化、活用、それらの思考スキルを獲得し、料理の栄養的特徴から食事の栄養的特徴を判断し目的に合った食事を選択する能力と捉え、食物選択力を形成する授業モデル及び教材を開発する。

本研究は、次の手順を進める。まず、マルザーノらの学習理論を援用し食物選択力を形成する学習を開発する意義を明確にした上で、日常生活で活用できる知識の様相とその学習方法を検討し、援用する筋道を明らかにする。そして、食物選択力に関する実態調査及び予備的授業実践を行い、食物選択力を形成する授業モデル及び教材の開発課題を検討し、授業モデル及び教材の開発を行う。これらの開発された授業を実践し、知識の獲得、構造化、活用及び知識を構造化する思考スキルと知識を検索し活用する思考スキルの獲得について検討し、授業モデル及び教材の有効性と食物選択力の形成過程を明らかにする。

#### 第1章 「学習の次元」による食物選択力形成の検討

本章は、「学習の次元」により知識の様相を明らかにし、その学習方法を検討した上で、食物選択力形成に関する知識とその学習方法を分析し、食物選択力を形成する学習を構想する道筋を明確にした。

マルザーノらのいう知識の様相から、学習内容には「事実」としての知識に加え、「一般化」としての知識、さらに、思考スキルを直接的に指導する内容を組み入れる必要があると考えられた。一方、学習方法は、「学習の次元」の中で「事実」としての知識を獲得し統合する「次元2」の学習、知識を拡張、深化させ構造化する「次元3」の学習、知識を活用する「次元4」の学習、そして、これらの学習で同時に思考スキルを形成することが重要であり、また、「次元3」の学習の中で、「次元2」の学習で獲得した知識の学び直しを行い、「次元4」の学習の中で、「次元2」の学習で獲得した知識を学び直すと同時に「次元3」の学習の中で獲得した知識を拡張、深化し構築した知識構造をより精緻なものにするというように学習が展開していく包摂的学習が有効であることが考えられた。

以上のことから、食物選択力を形成する学習を以下の4つの学習で構成することとした。すなわち、「次元2」を援用し食品群の知識を既存の知識に統合する学習、「次元3」を援用し料理の栄養的特徴と摂取量を理解させると同時に料理レベルで食品群と出会い直し、その理解をより確かなものにする学習、同時に帰納的推論の手順を直接的に指導する学習、「次元4」を援用し知識や思考スキルを活用して子どもの生活課題を解決する学習である。

このような学習展開を行うことで、食物選択力を形成し、日常生活で知識を活用できないという課題を解決できると考える。

## 第2章 食物選択力を形成する学習方法及び教材の検討

本章では、第1章で検討した食物選択力を形成する学習を具体化するため、大学生及び子ども（小学校5年生）の食物選択力の実態を明らかにし、予備的授業実践を行った。その結果を踏まえて、食物選択力を形成する授業モデル及び教材の開発課題を検討した。

大学生の食物選択に関する実態から、知識構造の構築、またその思考スキルを獲得するための学習方法及び教材を検討する必要があることが明らかとなった。そこで、食物選択力形成に必要な「基準となる料理」の栄養的特徴の食品群の種類と量をシールの色と個数で理解させる「料理－食品群充足率カード」を考案した。考案した教材は、小・中・高等学校の教師の評価及び小学校5年生を対象とした授業実践から、その有用性が明らかとなった。次に、以上の結果及び第1章の検討を踏まえ、小学校5年生を対象に予備的授業実践を行った結果、約80%の子どもが食品群の種類を正解し、食品群の特徴から知識構造を構築していた。そして、食品群の種類を活用し、料理や食事の栄養的特徴を判断していることが明らかとなった。しかし、①料理の栄養的特徴を関連付けた食事構成の理解、②料理の栄養的特徴（食品群の量）の理解、③その一般化による知識構造の構築、④シールの個数を活用して食事の栄養的特徴（食品群の量）を推論すること、⑤シールの色と個数を手がかりに推論する思考スキルを学ぶための授業に課題があることが明らかとなった。

以上のことから、推論する方法を直接的に指導する学習場面を導入し、一方で、料理や食事と視点を変えながら、その栄養的特徴を推論し、繰り返し料理や食事の栄養的特徴（食品群の量）を考える学習を行うことで、その理解を確かなものにし、一般化によ

る知識構造を構築し、同時に知識を構造化する思考スキルを獲得することができると考えた。

### 第3章 食物選択力を形成する授業モデル及び教材の開発

本章では、第2章で明らかとなった開発課題に基づき、食物選択力を形成する教材および授業モデルの開発を行った。

授業モデルの題材は「栄養的バランスの取れた食事」、目的は「食事の栄養的バランスを理解し、目的にあった食事をどのように選択したらよいかを考えることができる」とした。第1次から第4次の計7時間で構成した。第1次は、栄養素等の「事実」としての知識を獲得し、それらに関連づける。そして、食品群の種類から知識構造を構築すると同時に食事の栄養的特徴から食事構成を学び直す。これは、食事構成に関する課題の改善となる。第2次は、料理の栄養的特徴及び食事1食分の適切な量に関する知識を獲得し、さらに、料理の栄養的特徴に関する知識を構造化する。同時に食品群の種類を学び直しを行う。料理の栄養的特徴、その構造化に関する課題の改善となる。第3次第1時は、「基準となる料理」を手がかりに、日常生活で出会う料理の栄養的特徴を推論し、知識を拡張する。同時に知識を構造化する思考スキルを直接的に指導する。思考スキルの獲得に関する課題の改善となる。この授業においても、食品群、料理の栄養的特徴、食事構成の学び直しを行う。第3次第2時は、「基準となる料理」を手がかりに、栄養的バランスの取れた食事を推論する。同時に、場面を変え繰り返し推論し、思考スキルを形成する。その上で、第4次は、学習した知識や思考スキルを全て活用し生活課題を解決する。

本授業モデルが従来の栄養学習と異なることは、知識を構造化し、活用する学習の中で同時に思考スキルを育成する学習を行うこと、加えて直接的に思考スキルを育成する学習を導入すること、どの学習場面においても、給食を教材化した料理及び食事モデルを用い、知識を日常生活と関連付けながら学習すること、さらに、繰り返し学び直し、獲得したそれぞれの知識を関連づけながら学習することである。また、料理の栄養的特徴を理解し、同時に食事の栄養的特徴を推論する手がかりとなる教材、思考スキルを直接的に学ぶ教材、多様な給食の献立を用いた知識を関連付けながら活用するための教材を考案した。以上の教材はいずれも、学び直しのための教材、思考スキルを育成する教材としても位置づけられ、マルザーノらのいう包摂的な学習のための教材を意味している。

### 第4章 授業実践

本章では、第3章で開発した食物選択力を形成する授業モデルを具体化し、授業実践の計画について検討した。

授業モデルに基づき具体化した授業の概要は、以下のとおりである。第1次では、栄養素、栄養的バランス、食事構成及び食品群（キー概念）についての知識の獲得、同時に食品群の知識構造の構築を行う。第2次は、「基準となる料理」の栄養的特徴（食品群の種類と量）、1食分に必要な量及び栄養的バランスの取れた食事に関する知識の獲得、「基準となる料理」の栄養的特徴の一般化による知識構造の構築、また知識を構造化する思考スキルの獲得を行う。第3次は、料理、食事と学習場面を変え、食品群、料理の栄養的特徴に関する知識の活用及び知識を検索、活用する思考スキルの獲得を行う。また、シールー

つ分にならない量，嵩と量の関係に関する知識の獲得を行う。第4次は，それまでに学習した知識を活用して食事の栄養的特徴を推論し，条件に適した料理を選択するという課題の解決をとおして知識の活用と知識を検索，活用する思考スキルの獲得を行うこととした。

教材は，給食の料理及び献立を使用し以下のとおり作成した。「基準となる料理」として，「主に血や肉となる」赤群と「主にエネルギーのもととなる」黄群を1食分に必要な量の半分より少し多く摂取できる量（シール4個分と3個分）を含む料理，「主に体の調子を整える」緑群を1食分に必要な量の半分より少し少なく摂取できる量（シール2個分）を含む料理を選定し，さらに，推論する方法を学ぶための料理と食事構成に基づいた料理を加え，「料理－食品群充足率カード」を作成した。次に，食事構成と栄養のバランスを理解する献立，料理の栄養的特徴の推論の仕方を直接的に指導する料理，栄養のバランスの取れた料理の組み合わせを考えさせる献立及び給食の料理に未学習のメンチカツを組み合わせさせた献立に関する4種類のワークシート，日常生活で出会う料理の栄養的特徴やシール一つ分に満たない量を理解する実物大料理カードを考案した。以上の教材はいずれも推論活動をとおして，知識の獲得，構造化，活用を可能にするための教材である。

## 第5章 授業実践による食物選択力形成過程の分析

本章では，前章で構想した授業を実践し，「事実」としての知識の獲得，「一般化」による知識構造の構築，目的に合った食事を選択するための知識の活用という3過程別に，食物選択力の形成過程を分析し，さらに授業モデルの有効性を検討した。

食品群の分類は，80%以上の子どもが正解し，また「基準となる料理」の栄養的特徴（食品群の種類と量）を回答した子どもは有意に正解率が上昇しており，これらの子どもは，知識の獲得がなされていると考えられた。これらの子どもはまた，未学習の食品を含めて食品及び「基準となる料理」の栄養的特徴について一般化による知識構造を構築できており，知識を構造化する思考スキルも獲得していると考えられた。

次に，授業後の子どもは，「基準となる料理」の栄養的特徴（食品群の種類と量）を手がかりに複合的料理の栄養的特徴（食品群の種類と量）を推論でき，その思考スキルを獲得していた。さらに，約80%の子どもが食品群の種類を手がかりに食事の栄養的特徴（食品群の種類）を推論することができ，またその思考スキルの獲得ができていた。しかし，「基準となる料理」の栄養的特徴（食品群の種類と量）を手がかりに食事の栄養的特徴（食品群の種類と量）を推論することは，栄養のバランスのよい食事は80%以上の子どもができていたが，緑群の少ない食事，黄群の多い食事については約半数に留まり，その原因として「基準となる料理」の食品群の量を誤っていることが考えられた。量を誤って把握している子どもも含め，思考スキルが獲得できていることが明らかとなった。これらの子どもに対しては，ワークシートによる推論の学習が有効であったことが推測される。

また，条件に適した食事の栄養的特徴（食品群の種類と量）を正しく判断できた子どもは，約70%が食品群の種類や量，料理等に関連付けており，知識の関連付けは，食事の栄養的特徴を推論する上で重要であることが明らかとなった。

以上のことから，提案した授業モデルにより食物選択力の形成が可能であると考えられる。

さらに，食物選択力の形成過程として，知識（食品群の種類）を獲得し，その知識構造



を構築する「構造化（食品）」，食事場面で食品群の種類を活用し食事の栄養的特徴を推

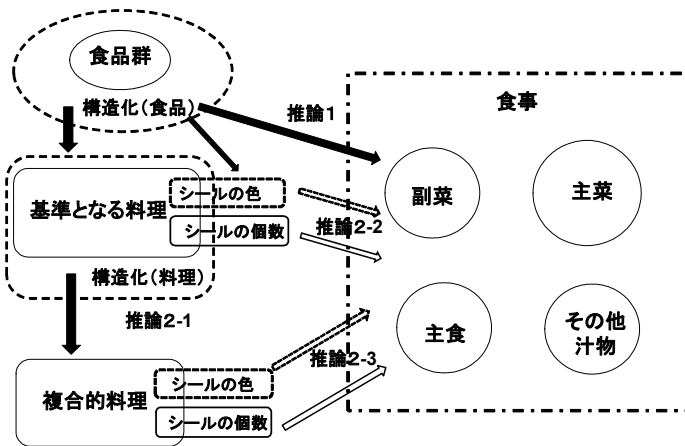


図1 食物選択力形成過程の思考

論する「推論1」，食品群の知識構造を精緻なものにすると同時に、「基準となる料理」の栄養的特徴（食品群の種類と量）を獲得し，その知識構造を構築していく「構造化（料理）」，「基準となる料理」の栄養的特徴を活用し，複合的料理の栄養的特徴を推論する「推論2-1」，同じく「基準となる料理」の栄養的特徴を活用し食事の栄養的特徴を推論する「推論2-2」，複合的料理

の栄養的特徴を活用し食事の栄養的特徴を推論する「推論2-3」が考えられた（図1）。

条件に適した食事を正しく判断できた子どもの思考過程は，図1のどの局面にも躓きがなかった。正しく判断できなかった子どもの思考過程は，①知識を関連付け総合的視点から活用できない，②シールの個数（量）の捉え方が異なる，また③「推論2-2」に躓きがある，④「構造化（料理）」，「推論2-1」，「推論2-2」に躓きがある，⑤「推論2-1」，「推論2-2」に躓きがあり，問題の意図を取り違えている，⑥最初の知識の獲得とその構造化で躓いているという6パターンに集約できた。

以上のことから，知識を獲得しているだけでは活用ができず，知識を活用するためには，知識を構造化する思考スキルと知識の検索，活用の思考スキルの獲得が必要であること，また思考スキルが獲得されていても，正しい知識の獲得，構造化ができていなければ適切な知識を検索し，活用できないことが示唆された。

## 終章 総括

終章では，本研究で得られた知見及び今後の課題について総括を行った。

家庭科における栄養教育の課題は，学習した知識を日常生活で活用できないことであった。そこで，小学校家庭科を対象にマルザーノらの学習理論を援用し，学習した知識を日常生活の食事場面で活用できる能力を食物選択力とし，その形成を可能にする授業モデル及び教材を開発し，授業を行い，その有効性と食物選択力の形成過程を明らかにした。

マルザーノらの「学習の次元」の「次元2」，「次元3」，「次元4」の単元設計を援用して開発した授業モデル及び教材は，食物選択力に必要な「事実」としての知識の獲得，「一般化」により構造化された知識の獲得，知識を活用する能力，それぞれの過程で必要となる思考スキルの獲得ができ，食物選択力の形成に有効であることが明らかとなった。食物選択力の形成過程は，「構造化（食品）」，次に「構造化（料理）」，あるいは「推論1」，次に「推論2-1」，あるいは「推論2-2」であることが明らかとなった。また，条

件に適した食事を正しく選択できなかつた子どもは、食物選択力の形成過程のどの局面かで躓きがあること、あるいは知識を関連付け、総合的視点から活用できないこと、量（数値）の捉え方に課題があることが明らかとなった。

本研究で食物選択力形成のための授業モデル及び教材を開発できたことは、子どもが学習した知識を日常生活で活用し、健康な生活を可能にすることに寄与できると考える。

本研究の意義と特色は、第一に食物選択力を形成するために必要となる知識の獲得、構造化、活用、そして、知識を構造化する思考スキル、知識を検索し活用する思考スキルを獲得する授業モデルを開発し、その有効性を実証できたこと、第二に食物選択力形成過程を明らかにし、知識を活用できない子どもの躓き箇所を分析できたこと、第三に食事の栄養的特徴を推論する手がかりとなり、知識を関連づけて理解する教材を開発し、思考スキルを形成できたこと、第四に学び直しを行いながら展開する包摂的な学習を組み立て、そのための教材を開発し、知識を関連付けより精緻な知識構造を形成できたこと、第五に小学校段階で食品群の量の理解が可能であることを明らかにし、中・高等学校の栄養教育の改善に寄与できる成果を上げたことである。

しかし、今後の課題として、第一に授業実践後の経時的な分析を行うこと、第二に子どもの学び直しの様相を明確にすること、第三に使用する食品群の妥当性を検討すること、第四に自由記述による思考に関する評価の限界を克服すること、第五に子どもの量の捉え方を明確にすることが必要である。

## 引用及び参考文献

(欧文文献)

- 1) AAFCS (アメリカ家政学会) ホームページ (2012.12.25 現在), School Nutrition Association, School Meals: A Nutritious Choice for Your Students!  
[www.aafcs.org/Advocacy/TIS.asp](http://www.aafcs.org/Advocacy/TIS.asp)
- 2) AAFCS (アメリカ家政学会) ホームページ (2012.5.13 現在), Information Bulletin for Pre-Professional Assessment and Certification in Nutrition, Food, and Wellness  
<http://www.aafcs.org/FCSstandards>
- 3) American Association of Family and Consumer Sciences (2010), *Information Bulletin Pre – Professional Assessment and Certification in Nutrition, Food, and Wellness*, p.3, pp.5 ~ 6,
- 4) BROWN, JOHN LUTHER (1996), *AN ETHNOGRAPHIC CASE STUDY OF THE DIMENSIONS OF LEARNING IMPLEMENTATION PROCESS AT A K-8 SUBURBAN MAGNET SCHOOL*, UMI Dissertation Services
- 5) FLOYD, KIMBERLY ELIZABETH (2003), *THE RELATIONSHIP OF BODY MASS INDEX LEVELS, NUTRITION KNOWLEDGE, INFLUENCES ON FOOD CHOICES, DIETARY*

*HABITS, AND NUTRITION EDUCATION OF ADOLESCENT STU*, UMI Dissertation Services,

- 6) Robert J.Marzano, John S.Kendall (2007), *The New Taxonomy of Educational Objectives*, Corwin Press A Sage Publications Company, p.11
- 7) R.J.Marzano et al (2009), *Dimensions of Learning: Teacher's Manual (2ed ed)*, Hawker Brownlow EDUCATION, pp.43 ~ 112
- 8) RobertJ.Marzano,JohnS.Kendall (1996 ), *A COMPREHENSIVE GUIDE TO Designing Standards-Based Districts,Schools, and Classroom*, McREL, pp.1 ~ 10
- 9) SCHIFFERLI, ERINN, (2006), *THE INFLUENCE OF NUTRITION EDUCATION ON THE SCHOOL LUNCH CHOICES OF CHILDREN*, UMI Dissertation Services
- 10) USDA (アメリカ合衆国農務省) のホームページ(2013.10.11 現在), <http://fnic.nal.usda.gov/dietary-guidance/myplatefood-pyramid-resources/usda-myplate-food-pyramid-resources>, <http://www.choosemyplate.gov/>
- 11) Wheeler,Donald (2007), *Using Summative Assessment Alignment Model and the Revised Bloom's Taxonomy to Improve Curriculum Development, Instruction, and Evaluation* ,UMI Dissertation Services

(邦文文献)

- 1) 足立己幸 (1984), 料理選択型栄養教育の枠組みとしての核料理とその構成に関する研究, 民族衛生, 第 50 巻第 2 号, pp.71 ~ 74
- 2) 石井克枝, 石田佳代, 小西史子, 武藤八恵子 (1998), 中学校及び高等学校における献立学習の実態, 日本家庭科教育学会誌, 第 41 巻第 3 号, p.60
- 3) 石井英真 (2002), アメリカにおける「改訂版タキソノミー」の検討—情意領域の教育目標化の課題を中心に—, 教育目標・評価学会紀要 第 12 号, pp.53 ~ 62
- 4) 石井英真 (2002), 「改訂版タキソノミー」によるブルーム・タキソノミーの再構築—知識と認知過程の二次元構成の検討を中心に—, 日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第 28 巻, pp.47 ~ 58
- 5) 石井英真 (2003), 高次の思考力を育む授業設計の方法を探る—「学習の次元」の検討を中心に—, 教育方法の研究, 第 6 号, pp.44 ~ 52
- 6) 石井英真 (2003), メタ認知を教育目標としてどう設定するか—「改訂版タキソノミー」の検討を中心に—, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 第 49 号, pp.207 ~ 219
- 7) 石井英真 (2004), 「改訂版タキソノミー」における教育目標・評価論に関する一考察—パフォーマンス評価の位置づけを中心に—, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 第 50 号, pp.172 ~ 185
- 8) 石井英真 (2005), アメリカの思考教授研究における教育目標論の展開— R.J.マルザーノの「学習の次元」の検討を中心に—, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 第 51 号, pp.302 ~ 315
- 9) 石井英真 (2007), アメリカにおけるスタンダード設定論の検討— McREL データベースに焦点を当てて—, 教育目標・評価学会紀要 第 17 号, pp.46 ~ 56

- 10) 石井英真 (2008), アメリカの思考教授研究における情意目標論の展開―「性行」概念に焦点を当てて―, 日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』 第 34 巻, pp.25 ~ 36
- 11) 石井英真 (2009), アメリカにおける教育意目標論の展開―パフォーマンス評価論による行動目標論の問い直し―, カリキュラム研究 第 18 号, pp.59 ~ 71
- 12) 石井英真 (2011), 現代アメリカにおける学力形成論の展開, 東信堂
- 13) 伊藤圭子 (2005), 軽度知的障害児に対する代表例教授法を用いた栄養教育の開発 (第 1 報) ―栄養教育授業モデルの組み立て―日本家庭科教育学会誌, 第 47 巻第 4 号, pp.318 ~ 326
- 14) 伊藤圭子 (2005), 軽度知的障害児に対する代表例教授法を用いた栄養教育の開発 (第 2 報) ―授業モデル開発と実践および学習過程の分析―日本家庭科教育学会誌, 第 47 巻第 4 号, pp.327 ~ 333
- 15) 伊藤圭子 (2005), 軽度知的障害児に対する代表例教授法を用いた栄養教育の開発 (第 3 報) ―学習の促進要因の検討―日本家庭科教育学会誌, 第 48 巻第 1 号, pp.3 ~ 9
- 16) 伊藤圭子, 中島祥子, 石田浩子, 山本奈美 (2009), 生活への活用を促す小学校家庭科における栄養教育の開発 (第 1 報) ―食物選択支援ツールの有効性―, 日本家庭科教育学会第 52 回大会発表要旨
- 17) 宇高順子 (2009), 料理の食品容積からわかる食品可食部重量および食品群別摂取量のめやす, 日本家庭科教育学会誌, 第 52 巻第 1 号, pp.43 ~ 51
- 18) 江原絢子編 (2001), 食の文化フォーラム 1 9, 食と教育, ドメス出版, p.179
- 19) 岡田みゆき, 土岐圭佑 (2012), 大学生の食生活の実態とその関連要因, 日本教科教育学会誌, 第 35 巻第 2 号, p.93
- 20) 岡本信一 (1998), 音楽科教育における創造的思考に関する研究―音楽の解釈・表現を促すメタ認知の効果―, 教育方法学研究, 第 24 巻, pp.105 ~ 113
- 21) 岡本信一 (2000), 音楽科における思考力を育成する学習環境― R.Marzano の "Dimensions of Learning" を視点として―, 教育学研究紀要, 第 46 巻第 2 部, pp.255 ~ 260
- 22) 岡本信一 (2001), 音楽科における思考力育成のための授業モデルの構築― Marzano. R. J. の ”思考のプロセス” を視点として―, 教育学研究紀要, 第 47 巻第 2 部, pp.189 ~ 194
- 23) 岡本信一 (2001), 音楽科における思考力育成カリキュラムの展開― R.Marzano "Dimensions of Thinking"―, カリキュラム研究, 第 10 号, pp.125 ~ 143
- 24) 岡本信一 (2002), 思考力育成カリキュラムにおける評価の方法, 教育学研究紀要, 第 48 巻第 1 部, pp.247 ~ 252
- 25) 岡本信一 (2002), 「創造的思考力」を育成するための音楽科の学習過程に関する教科教育学的研究, 博士論文 (兵庫教育大学), pp.5 ~ 34, pp.96 ~ 189
- 26) 岡本信一 (2005), 思考力育成カリキュラムにおける意味生成の方法―音楽科を事例として―, 兵庫教育大学研究紀要, 第 27 巻, pp.163 ~ 172
- 27) 岡本信一 (2006), 授業における思考力育成のためのカリキュラムの編成―音楽科を事例として―, 兵庫教育大学研究紀要, 第 28 巻, pp.111 ~ 116
- 28) 岡本信一 (2009), 音楽科における学習主体形成カリキュラムの今日的課題―

- Dimensions of Thinking Projects を視点として一, 兵庫教育大学研究紀要, 第 34 巻, pp.131 ~ 136
- 29) 岡本信一 (2010), 音楽科における思考研究の動向 (II) - "Dimensions of Musical Learning and Teaching" 以降を中心に一, 兵庫教育大学研究紀要, 第 36 巻, p.139 ~ 142
- 30) 加藤 (植山) 敦子, 筒井佐知子, 林田秩子 (2010), 高等学校調理実習におけるオリジナルレシピ集の開発ー食生活の自立を促す授業実践ー, 日本家庭科教育学会誌, 第 53 巻第 1 号, pp.47 ~ 51
- 31) 川喜田二郎 (1986), KJ 法, 中央公論
- 32) 河村美穂 (2010), 食育実践事例の特徴ー文部科学省委託事業の実践事例の分析から一, 日本家庭科教育学会第 53 回大会研究発表要旨集, pp.74 ~ 75
- 33) 厚生労働省ホームページ (2013.10.11 現在), 『平成 23 年国民健康・栄養調査』, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyoudl/h23-houkoku.pdf>
- 34) 河野公子, 小谷野茂美 (1999), 技術・家庭科 <家庭分野>の授業をどう創るか, 明治図書, p.27
- 35) 児玉喜久子他 (2010), 家庭科を中核とする食育プログラムの開発ー米飯とみそ汁の学習を中心にして一, 日本家庭科教育学会第 53 回大会研究発表要旨集, pp.24 ~ 25
- 36) 小西文子, 出石康子 (1994), 栄養指導を主体としたコンピュータソフトの開発, 日本家庭科教育学会誌, 第 37 巻第 2 号, p.88
- 37) 小林恭子 (2010), 平成 22 年度播磨西地区小学校家庭科教育研究大会紀要, pp.36 ~ 54
- 38) 小林恭子 (2010), 平成 22 年度播磨西地区小学校家庭科教育研究大会学習指導案集, pp.11 ~ 173
- 39) 櫻井純子他 (2010), わたしたちの家庭科 5.6, 開隆堂出版, pp.94 ~ 96
- 40) 佐藤真紀子, 吉村幸雄, 高橋啓子, 金子佳代子 (1996), 栄養バランスの良い食事への理解を深めるコンピュータソフトの開発, 日本家庭科教育学会誌, 第 39 巻第 1 号, p.59
- 41) 佐藤雅子他 (2010), 栄養の認識を深める学習の工夫ー「おいしさ」を中心に置き, 他教科と関連させて一, 日本家庭科教育学会第 53 回大会研究発表要旨集, pp.68 ~ 69
- 42) 佐藤文子, 竹田純子 (1990), 小学校家庭科食物領域におけるパソコン導入授業の有効性ー「食品に含まれる栄養素とその働き」の指導において一, 日本家庭科教育学会誌, 第 33 巻第 2 号, pp.40 ~ 42
- 43) 白井和歌子, 中村喜久江 (2002), 家庭科における食教育の改善の方策および教材の検討, 教育学研究紀要, 第 47 巻 第二部, pp.295 ~ 300
- 44) 白井和歌子, 中村喜久江 (2004), 家庭科における食教育に関する教材の開発, 教育学研究紀要, 第 49 巻, pp.655 ~ 660
- 45) 鈴木真優美, 福原桂, 金子佳代子 (2001), 小学校家庭科食物学習における概念地図法の有効性, 日本家庭科教育学会誌, 第 44 号第 2 号, p.106
- 46) 鈴木洋子 (2007), 小学校における家庭科担当教員と栄養職員 (教諭) の連携による食育の実態と課題, 日本教科教育学会誌, 第 30 巻第 2 号, pp.9 ~ 15

- 47) 鈴木洋子 (2008), 児童を対象にした食育推進への提言, 日本家庭科教育学会誌, 第 51 卷第 1 号, pp.11 ~ 18
- 48) 高橋洗治 (2001), 教育目標の新しい分類法—ブルームの分類法からマルザーノの分類法への発展—, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学編), 第 51 号, pp.203 ~ 220
- 49) 高増雅子, 足立己幸 (2004), 小学生における食品購買行動の食物選択力形成に及ぼす影響, 日本家庭科教育学会誌, 第 47 卷第 3 号, pp.236 ~ 247
- 50) 高増雅子, 足立己幸 (2007), 小学生における中食・外食選択型食教育プログラムの学習効果に関する研究, 日本家庭科教育学会誌, 第 50 卷第 1 号, pp.22 ~ 32
- 51) つくば市総合教育研究所編, 市原健一, 山田信博, 吉田和正, 柿沼宣夫, 樋口直宏, 岡野和夫, 杉田慶也, 毛利靖, 奥谷雅恵 (2012), つくば市教育委員会教育指導課, 新設「つくばスタイル科」の取り組み, 東京書籍
- 52) 長島和子, 好岡聿子 (1987), 小学校家庭科における栄養教育—カードゲームの導入による「食品と栄養素」の指導—, 日本家庭科教育学会誌, 第 30 卷第 2 号, pp.534 ~ 536
- 53) 中村喜久江 (1995), 献立学習における学習過程及び学習内容の改善, 岡山大学教育学部研究集録, 第 98 号, pp.161 ~ 164
- 54) 中村喜久江 (2001), 栄養的バランスの取れた食事を整える能力の育成—「料理-栄養」学習の構想—, 日本教科教育学会誌, 第 23 卷第 4 号, p.23 ~ 25
- 55) 中村喜久江, 西敦子 (2004), 「思考過程に注目した食物授業の設計—小学校段階で取り上げる 1 食分の食事について—」, 日本家庭科教育学会第 47 回大会発表要旨, p.37
- 56) 中村喜久江 (2005), 「小学校家庭科における給食を活用した教材の有用性—現場教師の評価から—」, 岡山大学教育学部研究集録, 第 128 号, pp.169 ~ 176
- 57) 中村喜久江, 西敦子 (2006), 「食べ物—食品」学習における教材の開発—マイカード及び実物大料理カード—, 日本家庭科教育学会中国地区会共同研究報告書「特色ある家庭科カリキュラム開発と授業研究」, p.4
- 58) 中村喜久江 (2006), 「食べ物—食品」学習における教材の開発—マイカード及び実物大料理カード—, 日本家庭科教育学会中国地区会共同研究報告書, pp.1 ~ 11
- 59) 中村喜久江 (2007), 思考的スキル育成の観点から構築する食物学習, 日本教科教育学会誌, 第 30 卷第 1 号, pp.29 ~ 38
- 60) 中村喜久江, 村上ちひろ (2008), 食品, 料理, 食事の栄養的特質を繋ぐソフト教材の開発, 暮らしき作陽大学・作陽短期大学「研究紀要」, 第 41 卷第 1 号, pp.69 ~ 80
- 61) 中村喜久江 (2009), 小学校段階における食事選択力に関わる思考的スキルの育成, 暮らしき作陽大学・作陽音楽短期大学「研究紀要」, 第 42 卷第 1 号, pp.27 ~ 42
- 62) 中村喜久江 (2011), 子どもの食物選択力を形成する小学校家庭科学習の検討, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部 (学習開発関連領域) 第 60 号, pp.91 ~ 100
- 63) 中村喜久江 (2012), 高屋幸子, 思考スキルの形成を目指した教材の活用—食品群の理解に着目して—日本教材学会第 24 回研究発表大会 (福山大会) 発表要旨

- 64) 浜津光代, 北島京子 (1998), 家庭科における献立学習のあり方に関する検討—実態から見る問題と課題—, 日本家庭科教育学会誌, 第 41 巻第 3 号, p.53
- 65) 針谷順子 (2003), 料理選択型栄養教育をふまえた一食単位の食事構成力形成に関する研究—「弁当箱ダイエット法」による食事の適量把握に関する介入プログラムとその評価—, 栄養学雑誌, Vol.61 No.6, pp.349 ~ 356
- 66) 樋口直宏 (1998), 思考教授プログラムにおける思考技能の構造と教材内容—アメリカ教材の分析を中心に—, カリキュラム研究, 第 7 号, pp.79 ~ 91
- 67) 武藤八恵子 (1997), 学習指導要領・教科書における献立学習指導内容の課題—戦後の歴史的検討から—, 日本家庭科教育学会誌, 第 40 巻 第 3 号, p.17, p.20, pp.23 ~ 24
- 68) 村上ちひろ, 中村喜久江 (2005), 食品の栄養的特質に関する教材の開発—料理の栄養価との関連に注目して—, 教育学研究紀要, 第 50 巻, pp.512 ~ 517
- 69) 村上ちひろ, 中村喜久江 (2007), 食品の栄養的特質に関するソフト教材の開発, 教育学研究紀要, 第 52 巻, pp.568 ~ 573
- 70) 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説 家庭編, 東洋館出版, pp.25 ~ 36
- 71) 文部科学省 (2008), 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編, 教育図書, pp.49 ~ 57
- 72) 文部科学省 (2010), 高等学校学習指導要領解説 家庭編, 開隆堂出版, pp.15 ~ 16, pp.29 ~ 30, pp.44 ~ 46
- 73) 文部科学省 (2013.7), 今後の学校における食育のあり方に関する有識者会議, 今後の学校における食育のあり方について (中間まとめ),
- 74) 文部科学省ホームページ (2013.10.11 現在),  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1296320.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1296320.htm)  
 調査結果については, 国立教育政策研究所ホームページ (2013.10.11 現在),  
<http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/index.htm>
- 75) 文部省 (1999), 小学校学習指導要領解説 家庭編, 開隆堂出版, pp.36 ~ 47
- 76) 文部省 (1999), 中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説—技術・家庭編—東京書籍, pp.48 ~ 55
- 77) 文部省 (2000), 高等学校学習指導要領解説 家庭編, 開隆堂出版, pp.33 ~ 35, pp.60 ~ 62, pp.91 ~ 94
- 78) 矢野由紀 (1995), 家庭科における食生活領域の学習指導 (第 1 報) —大学生の食事選択力と知識, 技能, 関心との関連—, 家庭科教育学会誌, 第 38 巻 第 2 号, pp.37 ~ 42, pp.46 ~ 48
- 79) 矢野由起 (2010), 家庭科における食物学習・栄養教育に関する研究, 日本家庭科教育学会誌, 第 52 巻 第 4 号, p.237
- 80) 山道裕子 (2004), 中村喜久江, 食教育で活用するソフトウェア開発に関する基礎的研究, 教育学研究紀要, 第 49 巻, pp.649 ~ 654
- 81) 山道裕子 (2006), 中村喜久江, 家庭科の食に関する授業で活用するソフトウェアの開発, 教育学研究紀要, 第 51 巻, pp.603 ~ 608